

こぎ出せた5人だから



TOKYO 2020+1

くまで、視覚障害がある有安は「二筋縄ではなかった」と振り返る。

2019年春、有安はメディア各社に手紙を送った。「ぜひ取材に来てください」。競技の認知度を高めようと知恵を絞り、強化にもあたっていた。順調に見えたが、昨年11月に1人が離脱した。

窮地を救ったのは、東京都内の盲学校に通う木村由(17)だった。今年に入り、やっと代表に滑り込んだというレベル。「技術も体力も未熟。みんなが手を差し伸べてくれ、成長できた」と

木村。ただ有安、右半身に障害がある八尾陽夏(24)、左手に障害がある西岡利拡(49)にとっては「救世主」だった。健常者でコックスの立田寛之(29)を加えた新チームができあがった。

「多様性」の象徴といえる種目で、集まった5人の年齢、性別、障害などは異なる。7月の強化合宿では、移動の車内で一緒に音楽を聴き、一緒に昼食を食べた。立田は「お互いが尊重し合う関係ができ、クルーがまとまりつつある」。

この日は予選2組の6位で、28日の敗者復活戦に臨む。有安は言った。「心に残るレースがしたい。将来、メダルに届くようなチームをつくっていきたい」

(斉藤佑介、榊原一生)

ゴールしたボート日本代表の有安諒平(34)は達成感を感じていた。「競技の知名度を高めたり、メンバーを集めてトレーニングをしたり。それが出場につながったかと思うと……」

27日、東京パラリンピックのボート混合舵手つきフオア(運動機能障害・視覚障害PR3)。初出場の本の5人は息を合わせ、夏空の水上を疾走した。

ボートが人気の欧州では花形種目だ。視覚障害、肢体不自由の男女各2人ずつ、健常者も担当できるかじ取り役(コックス)の計5人で、2000回のタイムを競う。本番にたどり着

混合舵手つきフオア予選に出場した日本チーム。右が有安諒平選手。27日、海の森水上競技場、矢木隆晴撮影